

## 歩きながら考える——鶴見良行のナマコ学を継ぐ

赤嶺 淳

### 『ナマコの眼』

「鶴見アジア学」なる独自のアジア研究を世に問うた故鶴見良行氏（一九二六—一九九四）が晩年（一九九〇年）に上梓した大作である。一九八六年に大学生となったわたしは、プラザ合意世代というべきか、円高の恩恵をうけ、学生時代に海外の「自由旅行」を満喫した世代に属している。なにしろ沖縄へ行くよりも、バンコクやマニラに行く方が安かった時代である。

いまから思えば、わたしのアンテナが貧弱で文献探索技術が稚拙であっただけのことである。しかし、当時、東南アジアに関する情報を求めると、必ずや鶴見良行にたどり着いたものだ。鶴見が上智大学で教えていることを知ったわたしは、ずうずうしくも教室まで押しかけてしまった。一九八七年五月だったと記憶している。以来、鶴見が住居を京都に移すまでの二年間、毎週水曜日に鶴見の「追っかけ」をすることになった。

授業では、刊行されたばかりの『海道の社会史——東南アジア多島海の人びと』（一九八七年）を教科書に、脱稿後に得た知見が、興奮気味に披露されていた。当時、鶴見は筑摩書房のPR誌『ちくま』に『ナマコの眼』のもととなる原稿を連載中であり、そうした知見の多くが『ナマコの眼』に関するものでもあった。

そんなわたしの、ささやかな自慢は、『ナマコの眼』が書店に並ぶ前に入手したことである。一九九〇年一月末に、卒論を終えた報告に京都の鶴見邸を訪問した時のことである。たまたま筑摩書房の編集者が出来たてホヤホヤの同書を持ってきており、包みから出てきた一冊を頂戴したのである。

早速、読んでみた。しかし、正直なところ、まったく理解できなかった。あつかう地域と時代が壮大すぎて、話についていけなかったのだ。大学院に進学し、これから東南アジア研究を本格的にやろうとした矢先のことである。わたしは、焦った。しかも、同書は新潮学芸賞を受賞し、名著の誉れ高い作品とされている……

次に同書を手にしたのは、その二年後のことである。フィリピンへの留学を控え、読み直してみる気になったのだ。すると、今度は、少しだけはあるものの、それでも鶴見の世界に没頭することができた。というのも、この間に、わたしは、自分の足でインドネシアのスラウェシ島やマルク諸島、フィリピンのスル諸島など、同書の舞台を歩く

機会を得ていたからだ。

鶴見のナマコ学は、東南アジア史を鏡として硬直した日本社会のあり方を批判する思想でもあるので、そのユニークさを一言で表現するのは、大変、困難である。強いて言えば、こんな感じだろうか？ ①アジアとヨーロッパをむすぶメジャーなハイウェイともいえるマラッカ海道ではなく、オーストラリア北部からスラウェシ島西側を通過し、中国へと北上するマイナーな海道——マカッサル海道——を想定し、この海道に隣接するマカッサル海域（現在のインドネシア）とミンダナオ地域（現在のフィリピン）とが、ナマコ貿易を通じて形成されたひとつの文化圏であると仮定したこと、②同様に蝦夷地を含む江戸時代の日本列島から中国大陸にいたった海道にも着目し、オーストラリア北岸から蝦夷地にいたるまでの「ナマコ海道」圏とも表現すべき海域連鎖の歴史世界を再構築してみたこと、の二点に集約できるであろう。つまり、国家を相対化することで見えてくる世界を叙述することで、国家単位の歴史叙述を批判したのであった。

もちろん、こうしたモノから見えるアジア史のダイナミズムについては、わたしも可能性を感じてはいた。しかし、浅学のわたしに、壮大な歴史を叙述する力はない。第一、鶴見のマネをしても、所詮は二番煎じである。だから、わたしは、敢えてナマコを避けてきた。それでも、最終的にナマコに魅せられたのは、まったくの偶然にすぎなかった。そして、鶴見の意図とは反対に、国家を単位とするワシントン条約という国際条約で展開される野生生物保護の現場に注目するようになったのも、まったくの偶然であった（ナマコも、ゾウやクジラとおなじく野生動物なのだ）。以下、拙著『ナマコを歩く』（二〇一〇年）誕生の舞台裏を紹介しつつ、わたしが意図するナマコ学の構想と実践を披露したい。

わたしの「ナマコ狂い」は、一九九七年七月にマレーシアと国境を接するフィリピンの離島、マンシ島を訪れたことに端を発している。マンシ島は周囲三キロメートルにすぎない、どこにでもありそうなサンゴ礁島であった。しかし、隣国マレーシアとの密貿易や南シナ海におけるダイナマイト漁によって、経済的な繁栄を謳歌しているのだった。圧巻は、南沙諸島におけるナマコ漁の話であった。男性およそ二〇名が、二カ月間にもわたって船上で共同生活を営みながら、中国やベトナムをはじめ近隣六カ国が領有権を主張しあう海域でひたすらナマコを獲りつづけるという話であった。事実、島には、各種のナマコがゴロゴロしていたし、「ナマコ御殿」とでも形容すべき立派な家も散見できた。わたしはマンシ島を訪問したその日に、マンシ島でナマコ研究をおこなうことを決意した。

その瞬間から、わたしは鶴見との差別化を意識せざるを得なくなった。鶴見アジア学のユニークさは、ディシプリンにこだわるのではなく、商品の生産から流通、消費の一連の過程を俯瞰する「モノ研究」という手法にある。だが、ナマコに限っていえば、あつかう地域が壮大にすぎたのか、東南アジアの生産地に関する記述は、それほど厚くない。だから、マンシ島の事例を丹念に記述すれば、それだけで鶴見の仕事の一角を崩せると考えた。そこで同島でナマコの仲買をしているタンドアさん宅に日参し、島で流通している一八種ほどのナマコの形態と価格、現地名を覚えることからわたしの調査は始まった。

タンドアさん宅に持ち込まれるナマコは、生鮮品（活ナマコ）の場合もあれば、一次加工と呼ぶべきか、すでに茹でられ、ある程度乾燥させた半乾燥品もあった。持ち込まれたナマコの状態をみて、茹でかたが足りなければ、タンドアさんがもう一度煮直すことになる。そんな様子を観察したり、写真に収めたりしながら、わたしも作業を手伝わせてもらった。第一、獲れる量が量だし、もともとマンシ人は丁寧に作業するという志向がつよいわけではない。だから、ほとんどの乾燥ナマコは、ひん曲がっていたり、窪んでいたりしたものだ。しかし、ごくまれに実物の縮小コピーさながらに、まさに3Dプリンターで作ったミニチュア模型のように精巧に干しあがったものもあった（もつとも、当時、3Dプリンターなどは存在しなかったが）。わたしは、そうした乾燥ナマコの美しさに惹かれ、それらを収集するようになった。そうしたサンプルを眺めたり、触ったりしながら、質感を鍛えたおかげか、三週間ほどの見習いを経て、乾燥ナマコを分類することができるようになった。

こうしてまとめた初めての論文が、『国立民族学博物館研究報告』第25巻1号に掲載された「熱帯産ナマコ資源利用の多様化——フロンティア空間における特殊海産物利用の一事例」（二〇〇〇年）という論考である。文字制限のない媒体であったため、四万字を費やし、ただデータをやみくもに突っ込んだだけのものである。たしかにナマコの分類や当時の市況については、非常にマニアックな記述ができたとは自負していたものの、「はたしてそれが、どのような意味を持つのかは、著者本人にもわからない」という情けないものであった。

しかも問題は、ここからであった。ナマコ海道の実態を明らかにするには、主要な都市を転々としなくてはならない。マンシ島から出荷される乾燥ナマコの集散地であるパラワン島のプエルト・プリンセサの仲買人までは、調査は容易であった。タンドアさんと仲買人を訪問したこともあり、親切に対応してくれたものだ。しかし、そこから先が

壁であった。プエルト・プリンセサからマニラへ船で移出されることはわかっている。しかし、肝心のマニラ在住の輸出商が面会してくれなかった。

ことは香港でも同様であった。世界一の乾燥海産物市場である香港で乾燥海産物があつまる地域は南北行 (Nan Pak Hong) と呼ばれている。南北行は「北方や南方の雑貨をあつかう店」といった意味で、香港島の上環地区内の一部をさす総称である。若気のいたりそのものであるが、わたしは、思いつくかぎりの伝手を頼り、またはアポなしでの飛び込み調査を何度も試みたが、店頭で追い返されるのが常であった。

しかし、そんな状況にも転機がおとずれた。二〇〇四年のこと、香港の貿易商たちの(一部の)態度がフレンドリーになったのである。ナマコだけではなく、すでにサメもワシントン条約という、絶滅の危機に瀕した野生生物の国際貿易を規制する場の俎上にあり、関係者の一部にワシントン条約問題と腰を据えて取り組まなくてはならない、という気運が醸成されつつあったのである。

白状しよう。ワシントン条約問題を契機として香港の間屋さんたちの姿勢がフレンドリーになったとき、わたしは、自身のモノ研究に厚みがでることを直観できた。難攻不落だと思っていたナマコ・ネットワークの頂点に登りつめた思いだった。執務室に招き入れられ、給仕してくれた普洱茶を飲みながら、内心、ほくそ笑んだものである。しかし、かれらと懇意になるにつれ、かれらなりの危機感を共有するようになった。当然ながら、かれらは、自分たちが扱うナマコがなくなれば「商売あがったり」となる。即座の貿易禁止は困るが、自分たちの商売を持続可能とするためにも、管理には協力していきたいと考える商人も少なくない。

翻ってみれば、わたしは、問屋さんたちに、どのような協力をなしうるのか？ 自分は、ただ好事家的にナマコを追いかけているだけではないのか？ ナマコの持続可能性とは、どういうことなのか？ このような問いに自問自答しながら、自分の研究方向とその実践方法を模索せざるを得なくなった。そんな時、わたしは水産庁の研究者から誘いをうけ、ナマコをはじめとするワシントン条約の問題と取り組むこととなったのだ。

グローバルゼーション下の今日、水産物というモノ研究をおこなうには、生産・流通・消費の一連のシステムに加え、いまや国際会議という場も、必要不可欠な調査地であることはまちがいない。最終的には国家代表が投票するシステムではあるものの、その投票の背景には、さまざまな思惑を抱くNGOも存在している。なかには「国家」並みの資金力と政治力をもつNGOも少なくない。たしかに国際条約という場合は、鶴見の意図した脱国家的視座からは縁遠い。しかし、NGOが関与して展開される環境政治の実態は、まさに国家を相対化する可能性を秘めている。第一、鶴見が歩いた一九八〇年代は、

中国の購買力もそれほどでもなく、ナマコの資源状態が危惧されることなどない時代でもあった。

「鶴見さんなら、どうしただろう？」

ナマコを追ってきたこの二〇年間、何度、こうした問を発してきたことか。もちろんワシントン条約問題に首を突っ込みはじめたからといって、問題が解決したわけではない。しかし、少なくとも自分のなかでの迷いは消えた。最も大切なことは、文章を綴ること、国際会議に出席すること、漁師さんや問屋さんたちと語り合うこと、それら自分の言動のすべてが、政治性を帯びているという自覚をもちながら、複数の場を往還し、自分にやれそうなお手をつけていくことなのだ。拙著のタイトルを『ナマコを歩く』という風変わりなものとしたのは、「見る」、「聞く」だけではなく、「歩く」ということばに、調査研究の還元を意識した行為を込めたかったからである。

そんなわたしは、現在、石川県の能登なまこ加工協同組合の活動にはまっている。二〇〇三年ごろから、日本から中国に輸出される乾燥ナマコの価格が急騰し、その主要な産地である北海道や青森県では密漁が多発している。もちろん、能登でも乾燥ナマコ用のナマコを一次加工してはいる。しかし、能登が魅力的なのは、国内市場を意識してコノワタ（腸の塩辛）やコノコ（生殖巣の乾燥品）などの伝統的ナマコ商品をはじめとした「能登なまこ」を地域ブランドとすべく、努力しているところにある。その一例が、ナマコシーズンが終わる三月にナマコ供養祭を開催し、ナマコとナマコを育む七尾湾に感謝するイベントの開催である。しかし、ただ供養祭を執行するだけではない。供養祭のあとには稚ナマコの放流もするし、供養祭前日には、全国各地のナマコ関係者を招き、資源管理や文化史、薬効、商品加工など、ナマコのさまざまな側面について議論しあう「なまこサミット」も開催している。この二日間は、参加者に能登なまこを利用した各種料理を食べてもらう機会を提供し、能登なまこのみならず、能登の食材と自然のすばらしさをアピールする格好の機会でもある。

能登なまこ加工協同組合の取り組みは、日本におけるナマコ食文化の多様性をあらためて認識させてくれる。同時に中国への輸出一辺倒に傾注している国内各地のナマコ産地へのささやかな抵抗でもある。もっとも、能登も漁業者の高齢化は著しく、バラ色の未来が待ちうけているわけではない。だからこそ、こうしたイベントを契機として、地域内外からの関心を喚起しようとしているわけである。能登なまこ供養祭も、全国にあまたある食イベントのひとつにすぎない。だが、「継続は力なり」でもある。今年六回目を迎える能登なまこ供養祭は、三月二一日に七尾市で開催される。ひとりでもおおくの人が能登を訪問し、能登のすばらしさを満喫してくれることを期待している。